

町医者だより

<発行・お問合せ先>

おおわだ内科呼吸器内科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

シャポール本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポール改札口)

2分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話 047-379-6661

おおわだ
内科
呼吸器内科

令和04年12月号

まだまだ続くコロナ感染症

令和4年12月12日東北大学の押谷仁教授のコロナ感染症に関する講演会を拝聴する機会がありました。過去に経験したH1N1亜型インフルエンザ(スペイン風邪)のパンデミックが3年で終わったことから、来年の春には収束するのではないかと期待を持っていた私には衝撃的な内容でした。コロナ感染症はまだ、季節性インフルエンザのような感染状況ではなく、増減は見られるものの一年を通じて新規感染者がでていることから、あと数年はこのような状況が続くと考えられるということでした。現在2類感染症に位置付けられているコロナ感染症を安易に5類に変更するのは危険ではないかということでした。

オミクロン変異株によるコロナ感染症は循環器系への負荷が長期間続く可能性

押谷先生が参考論文で示しておりましたが、2022年3月号のNature Medicineにコロナ感染症罹患後30日を過ぎても脳血管障害、不整脈、心臓や心膜の炎症性疾患発症のリスクが上昇するという報告がありました。具体的には脳血管障害(脳梗塞1.52倍、一過性脳虚血発作(TIA)1.49倍)、不整脈(心房細動1.71倍、洞性頻脈1.84倍、洞性徐脈1.53倍、心室性不整脈1.84倍、心房粗動1.69倍)、心筋炎や心膜炎の1.85倍、そして心筋炎だけ見ると5.38倍となっています。それ以外にも心不全が1.65倍となっています。もう一つ注目すべき点はこれはかなり早期から指摘されているように肺動脈血栓を含む血栓塞栓症が2.93倍、深部静脈血栓症が2.09倍、表在性静脈血栓症1.95倍とリスクが上がります。この研究は2017年の米国のデータベースに基づいており現在のオミクロン変異株ではありませんが、コロナウイルスに共通する特性の可能性がります。2022年9月のCirculation誌には英国の巨大データベースの解析結果(2020年1年間の新規感染者)が発表されています。それによるとコロナ診断後約1年(49週)にわたり、脳梗塞や心筋梗塞に関係する動脈系血栓のリスクが0.5%、また静脈系血栓が0.25%上昇するとしています。オミクロン変異株は一見症状が軽いのですが、高齢者や心臓血管疾患を持病として持っている患者さんにとってはより重篤なインパクトを与える可能性があります。

対処法は

押谷教授の説明によると、我が国の献血者の血液の分析でコロナ自然感染者の割合が25%程度(NHKニュースでは27%前後)と少なく、現時点ではワクチンを定期的に接種して免疫賦活をしていくことが必要とのことでした。数カ月前のニューイングランド医学雑誌に米国の学校でマスク着用義務を廃止したら学内のコロナ感染者が増加したという報告が出ていました。マスク着用など個々の感染防御策の継続は現在においても現実的かつ効果的なものです。我が国の政治的リーダーがそれを言わなくても、厚生労働省はマスクの重要性を繰り返し国民に発信すべきではないでしょうか。